我　信　ず

2024/6/19

「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず、我はその独り子、我らの主イエス・キリストを信ず。」これは、キリスト教の歴史上もっとも良くできていると言われる信仰告白、「使徒信条」の出だしです。多くのクリスチャンが礼拝会のたびに、「信ず、信ず」と繰り返しています。でも、本当にこの言葉の意味を理解しているでしょうか。今日は信じるということについて、理解を進めましょう。

Ⅰ．　何を信じるのか　誰を信じるのか　母親の胸でスヤスヤと眠っている赤ちゃんは、母親を信じ切っています。まさに完全な信頼です。何かを信じているのではなく、母親を信頼しているのです。母親についていろいろと学び、母親についての知識に信頼しているのではなく、まだ何にも知らないまま、ただ本能的に母親を信頼して、安心しきっているのです。

私たちのクリスチャン信仰も同じです。何かを学んで理解して、その理解した事柄を信じるのではありません。私たちには本能的に目に見えないどなたかを感じ、信じる感覚が与えられています。罪によっていびつにされた、現在の私たちにもあるその感覚は、決して強くも濃くも正確でもありませんが、まちがいなく、良くはわからないまでも、どなたかを、誰かを信頼して来させたのです。天地の造り主であるお方、心を持ち、感情を持ち、理解を持ち、大きな恵みと深い愛をお持ちのお方が、私たち人間をお造りになったとき、その素晴らしい性質を私たちに分け与え、信頼するようにしてくださったのです。

私たちの信頼は、基本的に、乳飲み子が母親を信頼するのと同じです。自分のすべてをまかせ、ことごとくゆだねて、何一つ心配しないで過ごすのです。いま私たちは聖書によって、そのお方が天地をお造りになった創造主であることを知っています。私たち人間をご自分の姿に似せてお造りくださったお方だと、教えられ、より優れた知識をもって信頼しています。ただ本能的に造り主を感じて信頼するだけではなく、聖書の教えによってかなり高度な理解を得て、信頼することができるようにされているのです。

でも私たちは知識を信頼しているのではありません。聖書の教えやそれから構築された神学はとても大切ですが、私たちに与えられた霊的本能が最初です。何も知らなくても、乳飲み子が母親を信頼するように造り主を信頼して、体験を積み重ね、信頼を強めるのです。知識はその信頼を正しく堅固にし、間違いから遠ざけ、無知からくる誤りを避けることができるようにするのです。

ですから、私たちは知識を軽視してもなりません。知識には知識の価値があり、出る幕があるのです。知識のない信頼は、多くの場合、大きな間違いに陥ります。

Ⅱ．　信仰するのか　信頼するのか　聖書を学び神学を勉強すると、また教会で説教を聞いたりすると、

ふつう「信仰」という言葉が多用されています。これは聖書が翻訳されたときに、「信仰」と訳されたためにそのようになったのです。信仰という言葉にも、気高い方を信じ仰ぐ尊敬の念が込められていて、とても良い一面があるのですが、知的な理解、あるいは教義や教理を受け入れて、それを信じるという感覚が残ります。また、文字通り、信じて仰ぐという、日本人に特有の観念的な意味に流れがちであるうえ、何か、大人の信仰態度を思わせ、小さな子供にはなじまないように感じます。

信仰という言葉を「信頼」と翻訳すると、意味がはっきりする場合が少なくありません。「信頼」というと、小さな子供、乳飲み子にも用いることができる、日常の意味合いになります。神を信じるというのは、神を信仰するという前に、神を信頼することなのです。たとえ、神がどのようなお方であるのかよくわからなくても、自分に与えられている本能的感覚と聖霊の助けによって、乳飲み子の母親に対する信頼とおなじように、造り主である神を信頼できるのです。

私たちは「信仰」という言葉を不用意に多用することで、信仰の本質である「信頼」という意味を薄め、弱めてしまっています。その結果、知的な理解や観念的な、何となく、よくわからない存在をあがめる日本人的な信仰心で、聖書の教える信頼を会得できないままにしています。多くの「学のある」日本人が、信仰がよくわからないと言って、諦めてしまうのはそのためです。私たちは乳飲み子の信頼と同じ信頼をもって、創造者である神を信頼して行きたいものです。

コメントの追加 [佐々木正明1]: 信頼は結婚と同じ。

Ⅲ.　キリストを信じるのか　創造主を信じるのか

私たちはキリストを信じるのでしょうか、神を信じるのでしょうか。旧約聖書に教育され、神が送ってくださると約束してくださった救い主、すなわちキリストを待ち望んでいたユダヤ人にとって、創造主である神を信じるというのは当然のことであり、彼らの宗教生活の前提でした。ですから、キリストを信じるということが強調されたのです。新約聖書も、基本的に旧約聖書の教えの発展継続であり、神が約束してくださった救い主が到来したという、驚きのニュースを信じることが強調されました。それがそのまま、西欧のキリスト教の信仰になったのです。

でも日本人である私たちは、旧約聖書を持たず、神が救い主の到来を約束されたことも知りません。天地の創造者である神についてさえ、ほとんど知らないのです。それなのに、一足飛びにキリストを信じるというのは、あまりにも飛躍しています。日本人はまず、天地の造り主である神を信頼するところから、始めなければなりません。使徒パウロは、信仰による救いがユダヤ人だけにではなく、異邦人にも等しく与えられていることを説明したとき、「キリストを信じる信仰」について語り始め、なんの説明も抵抗もなく、「神を信じるアブラハムの信仰」に言い及んでいます。パウロにとって、キリストを信じる信仰も、神を信じる信仰も、原則的に同じものだったのです。

キリストよりも２千年も前に生きていたアブラハムは、当然、キリストについては全く何も知りませんでした。しかし、アブラハムもキリストの贖いのみ業のゆえに、神に対する信仰によって救われることができたのです。キリストを知らない人も、造り主である神を信頼するならば、キリストの贖いのみ業のゆ

えに救われるのです。日本人には、キリストを説明して正しい理解を持ってもらう前に、天地創造の神を信じるように勧めてあげましょう。日本人も、神に似せて造られた人間として、造り主を信頼する心を初めから与えられているのです。